生活科教育部会

子どもが生き生きと学ぶ生活科

～気づきの質を高めるための支援のあり方～

Ⅰ．研究の内容

1．学習会

・児童の書いた観察カードを用いて，部員全員で実際にコメントを書いて交流した。教師の主観になりがちなコメントだが，児童のさまざまな表現を見取る肯定的なコメントや，気づきを促す支援のコメントなど，多面的な見取りを交流することができ，自分の実践へとつなげていくのに参考になった。

・実際に授業で使用した観察カード（１年　あさがお・２年　野菜）を持ち寄り，情報交換した。同じ単元でも，気づきの質を高めるためにどのような支援や言葉がけをしているのか，また違った角度からの指導方法も見えてきた。そして，教師が気づいてほしいことをしっかりもっていること，活動途中での気づかせるような言葉がけや支援が大切ということが確認できた。

2．授業研究

（１）第２学年「ぐんぐんそだて　～やさいはかせをめざそう～」

（授業者　勝沼小　小川洋子先生）

野菜作りを通して，その過程での問題（虫食い・病気・生育不良など）や疑問などを，子どもたちが自分たちで解決していく活動を大切にした実践だった。

子どもたちは，「やさいはかせをめざそう」という目標に向かって，色分けされた４種類の「気づいたことカード」（「！はっけんカード」「？はてなカード」「◎なるほどカード」「！わかったカード」）を記入し，それをもとに「野菜クイズ」を作り，問題を出し合うという活動をくり返した。気づきの質を高めるために，疑問を自分たちで解決する，くり返し活動するということを仕組んだ実践で，子どもたちは様々なことによく気づいて発表していた。また，全体を見通した継続的な支援を積み重ねた成果として，観察する目も育ってきていた。３年生からの理科にもつながっていく内容でもあった。

（２）第１学年「みんなだいすき　～おしごとだいさくせん～」

（授業者　日下部小　竹川きよみ先生）

家の仕事や家族の役割などをふり返りながら，自分が家族に支えられていることや家族の一員であることに気づかせる実践であった。

家庭での生活をふり返ることで，今まで当たり前と思って見過ごしてきたことを見つけたり，それを発表し合うことで友だちと比べたりすることをくり返し行った。

また，細かいステップを踏んだワークシートを利用し，丁寧に言葉がけすることが気づきの質を高めるために有効的だった。

本時は，家庭で取り組んだ仕事のことを伝えるために，みんなの前で実際にやって見せたり，ビデオに撮ったものを見たりした。分かりやすく自分と比べやすかったため，多くの質問や感想などが出された。また，今度はこんな仕事に挑戦してみたいという次の活動への意欲をもつことができていた。

3．臨地研修

・金川の森で，ネイチャーゲーム協会指導員の佐藤孝彦氏を講師に迎え，ネイチャーゲームを体験した。ちょっとした準備で，自然とふれあうことができる活動を多く学ぶことができた。学校でもすぐにでき，低学年でも楽しみながら学習することができるような内容でとても参考になった。

Ⅱ．成果と課題

1．今年度の成果

・授業研究や学習会を通して，気づきの質を高めるための具体的な支援が学べた。

＊教材研究を丁寧にし，見通しをもった中での細かい指導が大切。1時間ごとのめあて（何を気づかせたいのか）をはっきりさせて，計画を立てること。

＊二つの授業研究では，カードやワークシートが独自に工夫されたものであった。また，それに対する教師のコメント（言葉がけ）が気づきを促すものであった。

＊同じ活動をくり返すことによって，子どもたち自身が先を見通すことができるようになり，活動がスムーズになる。

＊生活科では？を見つけられることが大切。疑問を解決することで，自分と友だちを比べたり，新たな発見をしたりできる。

＊発表のしかた，聞き方（質問・感想など）は日頃からの指導の積み重ね。

・毎年同じ時期の授業研究であるため，今までの実践と同じ単元となったが，2本の授業とも工夫され，新しい視点での内容で参考となるものだった。

・授業研究のための資料提供は，授業者だけでなく，授業をしていく上で全員の参考となった。

・学習カードへのコメントによる支援や見取りなどを情報交換することで，お互いに学び合うことができた。

・新学習指導要領改訂のポイントを確認したり，改訂された目標や内容を今後どのように指導していくかなどを共通理解したりすることができた。

2．来年度へ向けての課題

・「気づきの質を高める」とは具体的にどういうことか，そのためにはどういう支援をしていくとよいのかなど，講師を招いて理論研究することも必要。

（部長　保坂　恵）